

目 次

第一編

第一章 紫式部伝の輪郭 付・略年譜…………… 3

第二章 紫式部の家門の一考察 —— 曾祖父堤中納言兼輔の風流…………… 21

第三章 紫式部集の諸問題 —— 構成を軸に…………… 33

第四章 紫式部日記の表現…………… 67

第二編

第一章 光源氏の年紀…………… 85

第二章 蓬生・関屋巻の成立…………… 107

第三章 玉鬘十帖への一視角 —— 和歌注記をめぐって…………… 123

第四章	源氏物語における構想の継ぎ目（若菜巻の場合）……………	155
	* * *	
第五章	源氏物語の恋の基底——身内的恋の系譜——……………	164
第六章	雨夜の品定め の 位相……………	181
第七章	光源氏復権……………	193
第八章	「滯標」以後（光源氏の変貌）……………	204
第九章	玉鬘—六条院物語の成立……………	220
第十章	冷泉帝から今上帝へ……………	243
第十一章	薫論序説——柏木の影をめぐって……………	254
第十二章	愛執の薫……………	284
第十三章	宇治橋の長き契り……………	315
第三編		
第一章	死なぬ薬・死ぬる薬（竹取と源氏）……………	333
第二章	伊勢・源氏往還……………	355
第三章	源氏物語と菅原孝標女……………	366
初出	一覧……………	381
あとがき	（秋山 虔）……………	383

## 第一章 紫式部伝の輪郭 付・略年譜

伝説の霧に包まれて幽暗の闇に沈んでいたこの古代女流作家の形姿を掘り起こす試みは、元禄の安藤為章の『紫家七論』を先がけに、近代以降も与謝野晶子（『紫式部新考』、『太陽』〔昭3・1、2〕所収）、岡一男（『源氏物語の基礎的研究』〔昭29〕他）、今井源衛（『紫式部』〔昭41、新装版昭60〕他）、角田文衛（『紫式部とその時代』〔昭41〕他）、萩谷朴（『紫式部日記全注釈』昭46・48）他幾多の諸氏によって継承されて多くの成果を生んだが、なお闡明されざる薄明を随所にとどめて、われわれの接近を阻んでいる。その謎への挑戦は今後も続けられるだろうが、そのための足場を確かめ、謎のありかを見定める意図をこめて、以下展望的な一文を草してみたい。（注1）

### 一

王朝女流の多くがそうであるように、この作家の本名も未だに不明である。『御堂関白記』（寛弘四年正月廿九日条）『権記』（同年二月五日条）にみえる「掌侍藤原香子」に比定した角田文衛氏の仮説（前掲書）は、後宮女房の身分職掌の実体にたいする再考を促したが、これを源氏物語の作者に結びつける必然はなお乏しく、現段階では不明と言うほかあるまい。「紫式部」とは宮仕え後得た呼び名であろうが、姓や父兄・夫等の官職名を組み合わせて成る一般例に照らして異例の呼称である。「式部」とは父藤原為時が花山朝に式部大丞であったことに由るものとして納得できるとして、「紫」という姓や官職は考えられず、その娘賢子が「藤三位」と呼ばれたように「藤式部」と呼ぶのが穩当である